



敦賀高校の道場。過去に在籍していた柔道部員の写真がずらりと並ぶ

**柔道嫌いだっただ少年が
頭角を現した高校時代**

無差別級日本一を決める、全日本柔道選手権大会が4月29日、日本武道館で開催される。過去に、シンドーオリンピック金メダリスト・井上康生選手やアテネオリンピック金メダリスト・鈴木桂治選手が頂点に立った大会に、北信越地区代表として、県で41年ぶりに出場を果たすのが、敦賀市出身の西村久毅選手だ。柔道との出会いは、西村選手が5歳の時。

「幼い頃は、柔道が嫌いで仕方なかった。行きたくない、と駄々をこねては泣き叫び、寝そべってまで反抗していました」と当時を振り返り、笑う。嫌々ながらも道場に通り、小学5、6年の時には、県大会2位の成績を取る。

小学校卒業を機に、柔道から一時距離を置いた西村選手。中学3年間は卓球部に所属したものの、敦賀高校進学と同時に再び道着に袖を通す。高校1年の県大会新人戦では、3年のブランド物を物ともしない強さで見事優勝。部の期待を背負って挑んだ翌年4月の県大会では、



世界柔道選手権大会、オリンピックと並び、日本柔道界において柔道三冠に数えられる全日本柔道選手権大会。北信越地区代表として敦賀高校体育教諭・西村久毅(ひさき)さんが選出された。福井県の選手が同大会に出場するのは、41年ぶりの快挙となる。

巻頭特集

全日本柔道選手権大会出場

西村久毅

決勝戦まで勝ち進むが、強豪・福井高校の選手に敗北を喫する。

「高校1年の新人戦で優勝できたことは、運が良かっただけ。負けて初めて、実力不足を実感しました」

2年連続でインターハイ・全国高等学校総合体育大会)に出場するも、漠然と柔道を続けていたという西村選手を大きく変えた一戦があった。中国04総体(平成16年)柔道男子100キロ級1回戦、相手の襟を掴み、背負いこんだままでは西村選手の優勢だった。

「投げ飛ばすも勢い余って体勢を崩し、そのまま押さえつけられて試合は終了。勝てたはずの試合に負けたことが悔しかった」

高校生活最後の夏、少年の心に闘志の火がついた。

日本大学柔道部入部 チームを支える大将へ

平成17年、スポーツ推薦で日本大学に進学。西村選手は柔道部の門を叩く。日本大学柔道部は、ソウルオリンピックで銅メダル、パルセロナ、アトランタオリンピックで銀メダルを獲得した田辺陽子選手やシンドーオリンピックの金メダリスト・瀧本誠選手を輩出した、国内有数の強豪だ。

入部当初は、厳しい練習メニューについていくのがやっと。120キロ近くあった体重も、二気に100キロまで減った。練習中に足首の靭帯を損傷するなど、苦境を強いられる日々が続くが、練習試合の好成績から団体のレギュラーに抜擢される。

100キロ超には180センチ以上の選手が多い。身長176センチ・体重120キロという自身の体格は、決して有利ではない、と西村さんは話す。相手の懐に素早く入りこんで、瞬時に繰り出す背負い投げを武器に、団体戦では大将に任命。一本勝ちの得意技を持ち、チームメイトからの信頼を勝ち得た選手のみが選ばれる重要な役割だ。

「背が小さく重量のある体格は、腰の位置が低い。一般的に投げられにくい。団体戦には、どんなに技をかけられても負けない選手が重宝されるんです。これまで一本負けをしたことはほとんどありません」

平成18年度の全日本学生柔道優勝大会では、団体戦で3位に入賞。後の、北京オリンピックの金メダリスト・石井慧選手と共に、優秀選手賞に選ばれる。

大将としてチームを背負う一方で怪我に悩まされた大学時代。2年の時に負った前十字靭帯断裂により、選手生活は危険との隣り合わせだった。レギュラーの座を守りたい一心で手術を避けていたが、症状は次第に悪化。試合にも悪影響を及ぼすようになると、医師から手術を勧められる。キャプテンとしてチームを引っ張っていた大学4年の時だった。

日本一の座をつかみたい、でも手術を拒めば選手生命が絶たれてしまう。悩んでいた西村選手は背中を押したのは、世界選手権金メダリストで、現・日本大学柔道部総監督の高木長之助さんのアドバイス。「自分にとってつらい決断をしなさい」だったという。

「キャプテンなのに、チームに貢献できない自分が悔しかったけれど、こうして柔道を続けていられる今、手術を決断して良かった」と微笑む。



小学校5年生の西村さん。小学5、6年の時には2年連続で県大会2位に輝く

平成17年、スポーツ推薦で日本大学に進学。西村選手は柔道部の門を叩く。日本大学柔道部は、ソウルオリンピックで銅メダル、パルセロナ、アトランタオリンピックで銀メダルを獲得した田辺陽子選手やシンドーオリンピックの金メダリスト・瀧本誠選手を輩出した、国内有数の強豪だ。

入部当初は、厳しい練習メニューについていくのがやっと。120キロ近くあった体重も、二気に100キロまで減った。練習中に足首の靭帯を損傷するなど、苦境を強いられる日々が続くが、練習試合の好成績から団体のレギュラーに抜擢される。

「柔道は相手あってこそ。敬い、感謝の気持ちを持ち続けること」という恩師の言葉はいつも胸にある。念願の初出場となる、全日本柔道選手権大会開催まで残りわずか。地域や仲間を一身に背負って、西村さんは大舞台に上がる。

「出場を目標にこれまで練習に励んできました。出るには土を指して、勝ち進んでいきたい」と前を見据える。

**母校でコーチに就任
生徒たちの成長が楽しみに**

大学卒業後は大学院で教職課程を学びながら、了徳寺学園の実業団チームに所属。卒業後、敦賀高校柔道部コーチに就任すると、指導する楽しさを覚えた。

「敦賀高校柔道部には高校から柔道を始めた生徒が多く、小柄な選手が多い。まだまだ先は長いけれど、全国出場できるようなチームに育てたい。生徒たちの日々の成長を見守るのが嬉しいですね」と目を細める。今年の4月からは、敦賀高校の体育教諭として正式に赴任。指導も更に熱を帯びる。



PROFILE 西村久毅

にしむら ひさき

昭和62年2月24日生まれ、敦賀市出身。5歳から柔道を始め、敦賀高校時代には、インターハイに出場する。日本大学柔道部では、団体戦の大将を務め、引退後は、了徳寺学園の実業団チームで活躍を果たし、全日本実業団体柔道選手権大会100キロ超級では2位の成績を取る。趣味は、スポーツ観戦。